
蛇の別れ

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇の別れ

【Nコード】

N0045B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ベトナムの古いお話。蛇を飼い、使うことを生業とする老人が青い蛇と赤い蛇を拾い、育てる。その蛇達は老人に何を返したのか。聊斎志異のお話を舞台を変えて書いたものです。

第一章

蛇の別れ

ベトナムでの話である。昔からこの国は暑く、蛇の多い国であった。

その中には人を食う程の大蛇もいればとてつもない毒を持つものもいる。種類も数も非常に多く、その害もまた顕著であった。

だがそうした害のある蛇を飼い慣らす者達もいた。チャイという初老の男であった。

彼は蛇を操り、その害を取り除くのを仕事としていた。その為あちこちから呼ばれて生活は繁盛していた。もう髪が白くなってきたいる小柄な男だったが妻にも子にも恵まれ、幸せな生活を送っていた。

彼は蛇の害を取り除くのを仕事にしていたが決して蛇を嫌ってはいなかった。それどころか蛇を慈しんでおり、数多くの蛇を飼っている程であった。彼はとりわけ二匹の蛇を可愛がっていた。

一匹は赤い蛇、そしてもう一匹は青い蛇。彼は赤い蛇を赤と呼び、青い蛇を青と呼んでいた。そして日々これを可愛がっていたのであった。

だがそのうちの一匹である赤が死んでしまった。彼はそれを大層悲しみ、他の蛇をさらに愛するようになったがそれでも赤のことは忘れられなかった。

「そんなにお困りですか？」

「ああ」

長年連れ添っている女房にそう答える。声も肩も非常に落胆したものであった。

「あんないい蛇はいなかった」

彼は屋外の蛇を入れている籠を前にこう言った。

「他の蛇もいいがあいつと青は特別だったんだ」

「それは」

「いい蛇だったなあ。よく気がついて」
蛇を自由自在に操れる。その彼が認める程であったのだ。

「あいつがいないとな」

「まあそんなに気を落とさないで」

「だけどな」

女房の励ましにも元気を見せない。

「死んだもんは帰っては来ないし」

「まあまあ」

それでも何とか仕事はこましていた。その日は山寺で蛇を庭から下がらせる仕事を請けた。その仕事自体は彼にとっては簡単でありすぐに終わった。

「流石はこの国一番の蛇使いですな」

「はあ」

高名な住職の言葉にも返事はそろろだった。

「お見事です」

「まあ仕事ですから」

だが住職はそれには気付かない。ただ心から感謝を述べるだけであった。

「ではこれを」

「はい」

半分空ろな気持ちのまま謝礼を受け取る。おして山寺を後にした。この時彼は青を連れていた。背中に背負う籠の中に入れていたのだ。

「なあ青」

一休みし、腰を下ろしたところで彼は後ろにいる青に声をかけた。
「御前も。ちよつとゆつくりしたいか？」

青はそれに応えるかのように後ろの籠を鳴らした。了承の合図であった。

「わかった。それじゃあな」

チャイはそれを受けて籠を下ろした。そしてそこから青を出してやり遊ばせた。

青はそのまま茂みに入り姿を消したが彼は驚かなかった。いつものことだからだ。

青はいつも休みになると気儘に遊ぶ。だがいつも帰って来る。だから彼も安心していたのである。

しかしこの時は違っていた。その青が何時まで経っても帰って来ないのだ。

「おかしいな」

チャイの方も心配になってきた。だがもう暫く待つてみることにした。

だがそれでも帰っては来ない。彼は石の上に座り込んだまま待つていたがやはり来なかった。

どれだけ経っただろうか。早く帰らなければ日が暮れる。そうなれば危険なのはわかっていた。山の中には虎や豹がいる。それに襲われたらひとたまりもない。蛇使いといえど生身の人間なのだ。

仕方なく彼は諦めることにした。立ち上がるうとする。だがそこで目の前の茂みがガサガサと鳴った。

「青か？」

返事はない。だがすぐに青が顔を出した。

「おう、何をしていたんだ」

チャイは青が出て来たのを見て安堵の息を漏らした。

「待つていたのだぞ」

だが青は当然ながらそれには答えない。そして答えるかわりにゆつくりと前に出て来た。

「帰るか」

青を籠に入れようとする。だがそこで青の後ろがまたガサガサと鳴ったことに気付いた。

第二章

「何じゃ？また蛇か？」

蛇の音はもうわかつている。その音だった。彼はそれを聞くとその茂みに目を向けた。

すると茂みから一匹の小さな蛇が現われた。それは赤い蛇だった。
「赤」

彼はそれを見てあの赤い蛇を思い出した。

「いや、違う」

違うのはすぐにわかった。赤はもう死んでいる。だが見れば見る程赤にそっくりであった。

その蛇は逃げない。チャイの前でじっとしていた。彼はそれを見てゆっくりと手を差し出した。

「なあ、わしと一緒に来るかい？」

赤は声には出さない。だが彼の手の側に寄ってきた。そしてそこに乗ったのであった。

「そうか、来てくれるか」

それがわかっただけでよかった。赤は青と一緒に彼の籠の中に入った。こうして彼の飼い蛇となったのであった。

赤はその後正式に赤と名付けられた。そして青と一緒に彼のお気に入りになった。チャイは赤を手に入れてからまた元気を取り戻した。まるで赤が生き返ったかのようにであった。

「よかったですね」

「ああ」

家の中でも元気になった。彼は赤にも芸を教えたがよく覚えた。気が付くともうかなり大きくなっていたがそれでも使っていた。

「あれ、この蛇にまだ芸をやらせてるの？」

「筋がいいからな」

子供達にもそう答える。普通蛇はあまり大きくなると取り扱いに

重くなり過ぎるので手頃な大きさのものを使うのである。大きくなつた蛇は放して野生に戻してやるのがおおよその決まりとなつていた。

青もそうだが赤もかなり大きくなつてきた。とりわけ青はもう籠にぎりぎりで入るといった状態であつた。彼はそれを見て遂に決めた。

「もう帰してやるか」

放すことにした。山の奥まで行つて籠を開ける。

「ほうら、出る」

そう言つて青を籠から出してやつた。そして茂みの中に置く。

「もう芸はしなくていいからな。のびのびと暮らしていいんだぞ」

茂みから彼を見上げる青に対して言つた。

「そしてやがては竜になるんだ。頑張れよ」

この時代ベトナムでも蛇は歳を経ると竜になると言われていた。

だから彼も青に対してそう言つたのである。

「それじゃあな」

だが青は離れようとはしない。チャイの足元に置かれた籠に顔を摺り寄せてきた。籠の方でもガサゴソと動きはじめたのであつた。中にいる赤が動いてるのだ。

「どうしたんだ、これは」

チャイはそれを見て言つた。

「別れを惜しんでいるのか」

どうやらその様である。青の様子からもそれが伺える。

その意を汲んでやることにした。籠の蓋を開ける。するとそこから赤がすぐに飛び出した。そして青の方へと寄つて行つた。

見ていると二匹の蛇は首を絡み合わせていた。そして舌を出して顔を近寄せている。まるで話をしているようであつた。

「何の話をしているのか」

チャイは思つた。残念なことに蛇の言葉まではわからない。だが話をしているようだとわかつた。

それを見て赤も離れるかも知れないと思った。けれどそれでもよかった。

「なあ御前等」

彼は二匹に対して言った。

「御前達の好きにすればいいからな。わしのところにいるのも離れるのも」

二匹はそれを聞いてチャイに顔を向けてきた。

「どっちでもいいからな。好きな方を選べ」

彼はまた言った。そう言つて二匹の好きにさせることにしたのだ。だが去つたのは青だけであつた。彼は赤、チャイから顔を離すとそのまま茂みの奥へと入つて行つた。そしてそのまま姿を消したのであつた。

「行つてしまつたな」

チャイが消えた方を見て呟いた。赤は籠に戻つた。彼はその蓋を閉めて家へと戻つた。彼は帰る途中であれこれと考えていた。

「赤と青が入れ替わつたんだな」

赤が死んで青だけになつた。だがまた赤が入つて来て今度は青を放した。交換の様な形であつた。

何処となく天の配剤のように思えた。そう考えると別に辛くも惜しくもなかつた。

「赤がいるだけでもいいな」

彼は背負っている籠を見て呟いた。竹で作つた籠からは赤の重みが確かに感じられた。

その日はそのまま家に歸つた。起きると次の日からまた蛇使いの仕事である。青はもういないがそれでも彼は黙々と仕事を行うのであつた。

それから色々と蛇を手に入れたが一番よかつたのはやはり赤だつた。彼はいつも赤と一緒にいてあちこちを動き回つていた。だがその赤も大きくなつてきた。

「潮時かな」

その大きくなつた赤を見ながら思っていた時であつた。遠くの山の方で大蛇が出るという話を聞いたのであつた。

「それはどんな大蛇ですか」

仕事があると予感した彼は地元の役人に尋ねた。

「何でも木の様に太い蛇らしい」

その役人はチャイにそう語つた。

「木の様にですか」

「そしてやたらと大きいらしいのだ」

「それはまた」

「まだ害は出ていないがな。しかし出てからでは遅い」

「私が行つても宜しいでしょうか」

「そうしてもらえるか？」

「はい」

彼は快く応えた。そしてその山に向かうのであつた。

お供はいつも通り赤であつた。彼は赤を籠に入れて山に入った。

「なあ赤よ」

彼は山を登りながら籠で背負う赤に対して声をかけた。その周りは深い木と茂みが覆っている。

登りながら赤に声をかけたのだ。彼は落ち着いていた。

第三章

「どんな蛇だろうと怖くはないよ」

その声に応えるかのように籠の中で動いた。

「蛇だったらね。わしにとっちゃお手のものさ」

彼は言った。

「だからな。安心していいぞ」

そんなことを言いながら奥の方へ入る。そして腰を下ろして休んでいた。

「何時出て来るかな」

一服しながらそんなことを考えていた。

弁当を食べて煙草を吸いながら考えている。籠は足元に置いている。煙草を吸い終わってから暫くすると後ろの茂みがガサゴソと五月蠅くなった。

「来たか？それもかなり大きいな」

後ろを振り返りながら思った。

立ち上がったところでその大蛇が顔を見せてきた。見ればそれは彼が知った顔であった。

「青」

その蛇の顔を見て思わず声をあげた。

「青じゃないか。どうしてここに」

見れば青の方もチャイに気付いた。驚いた顔をしているのがわかる。

青は急に親しげな様子になった。そして彼に身体を巻きつけて顔を摺り寄せてきた。蛇の好意のしるしである。

「ははは、よせ」

じゃれる青を宥めて言う。

「まさかこんなところで会うとはな。元気そうだな」

青はそれに応えるかのように舌を出す。そして彼の顔を舐めてき

た。

見れば赤も籠から出て来ていた。そして青にじゃれついていた。

「そうじゃな」

チャイはそんな赤を見て前から思っていたことを二匹に言った。

「なあ御前達」

青から離れて二匹に言う。

「前から考えておったんじゃがな」

二匹は並んで彼の顔を見ていた。やはり青の方がかなり大きい。

「御前等一緒に住んではどうかな」

それを聞いた二匹はかなり驚いた顔になった。

「何、驚かんでいい」

二匹を安心させる為にこう言った。

「青や」

そして青に声をかける。

「元々赤は御前が連れてきた蛇じゃ。じゃから一緒にいていいんじや。それが道理じゃ」

青はそれを聞いて首を垂れた。

「赤もな。御前達は元々互いに好きなのじゃろう」

赤もその言葉に首を垂れた。

「だからいいんじやよ。何、わしのことは心配するな」
にこりと笑った。

「また別の蛇がいてくれるからな。じゃからな」

二匹はその笑顔を見て満足したようであった。チャイにもそれがわかった。

「ではな。ここでお別れじゃ」

二匹はそれを聞くとまた首を垂れた。

「じゃが一つ言っておくことがある」

それを聞くと首をあげた。

「それは食い物のことじゃ」

彼は言った。

「山奥はな、食べるものがたとある」

二匹の蛇に噛んで言い聞かせる。

「じゃから。人は襲うなよ」

蛇達はそれを素直に聞いているようであった。

「それだけはな。止めてくれ。よいな」

蛇達は頷いた。チャイはそれを見て笑みを浮かべた。

「わかってくれたようじゃな」

それだけで満足だった。蛇達がわかってくれるだけでよかった。

蛇達は最後に頭を垂れた。最後の挨拶であった。先に青が行き、次に赤が。そして別れた。

「元気でな」

チャイも最後に言った。これで彼と二匹は完全に別れたのであった。

その後二匹の行方は遥として知れない。ただ暫くして二匹のいた山から赤い龍と青い龍が昇り、チャイが死んだ時にその家の上に現われたという。だがこれが赤と青なのかは誰にもわからない。

全ては山の奥のひっそりとした話だ。だが確かに残っている話である。人と蛇の心の中に。

蛇の別れ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0045b/>

蛇の別れ

2010年10月8日15時04分発行